

無差別の健康女性

女性の健康というテーマは、身近なものでありながら、これまで十分に目が向けられてこなかった課題である。世界の医療・研究機関は何十年にもわたって女性の健康に十分な資金を投じず、人口の半数を脇に追いやってきた。結果として、このテーマの学術知見には大きな空白が残り、有効な治療も乏しい。

この領域が見落とされてきたことがわかる事例の中には、耳を疑うものもある。1970年代初頭、閉経後の女性で心筋梗塞のリスクが高いことが観察され、エストロゲンの予防効果を調べようとした研究で、8,341人が臨床試験に登録された。対象は全員、男性だった。

問題に、 光を当てる

こうした露骨なバイアスは、今の社会では起こらないだろうが、長年の調査・研究の偏りが積み重なった結果、女性の健康については慢性的なデータ不足が続き、課題の把握、疾患の診断、臨床治験の治療への橋渡しには大きな障壁が生じている。

その結果、子宮内腫瘍や更年期といった状態は未だ十分に理解されておらず、世界中で数億人の女性が、不妊などの生殖に関わる問題からホットフラッシュ(のぼせ・ほてり)、重度の睡眠障害に至るまで、耐え難い痛みと日常生活に支障をきたす症状に長年苦しんでいる。

さらに、女性たちは往々にして自身の訴えが医師に軽視されていると感じており、このような体験について「医療ガスライティング」と呼ぶ者もいる。結果として、診断確定までに何年もかかったり、提供されるケアの在り方に不満が募ったりする。

製薬企業とそれを支える投資家にとっても、女性の健康は難しい市場であり続けてきた。とりわけ2002年にWomen's Health Initiative (WHI)の研究結果が公表され、ホルモン補充療法(HRT)が乳がんや冠動脈疾患の絶対リスクをわずかに高めることが示されると、HRT市場は一夜にして壊滅

長きにわたって見過ごされてきた女性の健康問題。今、女性の健康への投資が、正しい判断であり、懸命なものであるとの認識が広まっている。ブランズウィックの**ベン・ハーシュラー**と**チャリス・グレッサー**が報告する。



イラスト: デビッド・ブランカート

的な打撃を受け、女性の健康分野の収益性に対する期待は大きく揺らいだ。

とはいえ今、メディアで更年期の症状をはじめとする女性の健康に関する課題が広く取り上げられるようになり、女性たちもホルモン補充療法(HRT)の見直しを含め、慢性的な健康問題への対応を求めるようになったことで、関心が再び高まりつつある。研究面でも前進が見られ、患者に新たな希望をもたらすと同時に、投資家にとっても新たな機会となることへの期待が高まっている。

「女性の健康はいま、過去のどの時代よりも注目度が高まり、女性たちも声を上げるようになってい

る。道のりは長いものの、方向性は間違っていない」と、バイオテック起業家でNeRRe Therapeutics CEOのメアリー・カー氏は語る。同氏の取り組みは、より良い治療の実現を一步ずつ前進させてきた。

製薬業界で長く経験を積んだ薬理学者であり、KaNDy Therapeuticsの共同創業者兼CEO(同社は2020年にバイエルが買収)でもあった彼女は、今後の機会と課題に関して独自の視点を持つ。彼女の会社売却を通じて、バイエルは非ホルモン型の更年期治療薬候補にアクセス可能となり、同候補は最近、承認申請に直結するピボタル臨床試験で有望な成績を示した。こうした動きの行く先は、女性の健康医療の新たな潮流を占う重要な試金石とみなされている。

得られる利益も大きい。平均寿命は男性に比べて女性の方が長いものの、McKinsey Health Instituteと世界経済フォーラムが2024年に発表した報告書によれば、女性は生涯の25%以上をも病気や障害とともに過ごしている。この差を縮めれば人々の生活は劇的に変わる。女性が健康に過ごす日が数十億日増えることで、2040年までに世界経済を1兆ドル押し上げる可能性もある。

乳がん、卵巣がん、子宮頸がんを除いた多くの女性の健康分野は、男女共通の疾患に比べて著し

この病気は
世界で約1
億9千万人の
女性に影響し、
激しい痛みや疲
労、時には不妊を
引き起こす。それ
でも診断までに
数年、場合によ
っては数十年も
要する。



Forbionの創業者兼マ
ネージング・パートナー
で医師のヒアート・ヤン・
ムルダー氏



バイオテック起業家で
NeRRe Therapeu-
ticsのCEOのメアリー・
カー氏

く資金が不足しているが故に、仮にわずかな投資増であっても、極めて大きな効果をもたらし得る。

現在、男性と女性の間には大きな医療格差がある。良性前立腺肥大症の男性の約8割、勃起不全の男性の約7割は診断を受けているのに対し、子宮内膜症の女性で診断を受けているのはわずか4割、更年期のほてりや寝汗など血管運動症状の女性は2割しか診断されていない。

このジェンダーギャップを解消するには、医療提供体制の改善、疾患の影響を正確に評価するためのデータ収集の拡充、そして性差に基づく生物学的違いを深く理解するための科学的アプローチの見直しが欠かせない。

こうした変革を促すには、この領域に投資する製薬企業やベンチャーキャピタルが期待できる金銭的リターンという「引っぱる力」と、社会全体が問題をより深刻に受け止めるという「押す力」の両方が必要になる。

近年は、女性たち自身が行動を起こし、記事や回想録、SNSを通じて声を上げ、女性の健康について自ら問題の解決に臨むことでこの「押す力」を生み出している。アメリカの女優ハル・ベリーや英国のテレビ司会者ダヴィーナ・マッコールといった著名人の活動も追い風となり、自分の症状を共有することに前向きになる女性が増えている。

ブランズウィック・インサイトのデータによれば、議論の高まりは、一流メディアやX(旧Twitter)で女性の健康問題が言及される件数の急増にも表れている。これは、解決余地の大きな未充足市場が存在するという、投資家の見方を後押しする。

同時に、女性の健康は各国政府からも注目を集め始めている。米国は2023年、Initiative on Women's Health Researchを立ち上げ、英国も2022年にWomen's Health Strategyを発表した。

研究室でもブレイクスルーが生じ始めている。更年期症状向けとしては初めての非ホルモン薬が成果を挙げたことで、長年置き去りにされていたこの領域への製薬企業の関心が高まった。子宮内膜症など、他の分野でも前進が続いている。

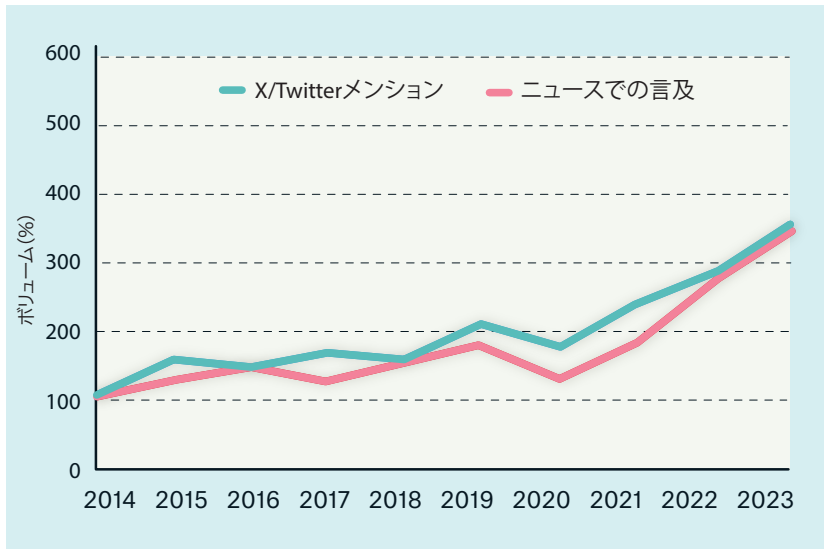
「満たされていない膨大なニーズが確かにあり、不十分なケアが社会に実損をもたらしている。だからこそ新しい治療に可能性がある」とカー氏は語る。「とはいえ、まだ始まったばかりで道のりは長く、女性の健康への関心はその芽生えの段階に過ぎない。」

また、障壁も残っている。社会にとっても個人にとっても新しい治療の価値をどのように計り、症状を和らげる効果に対して、医療システムが支払える公平な価格をどのように算出するかは、一つの大きな課題である。

「更年期の症状で入院することはないが、女性が本来の力を発揮できなくなったり、仕事に行けな

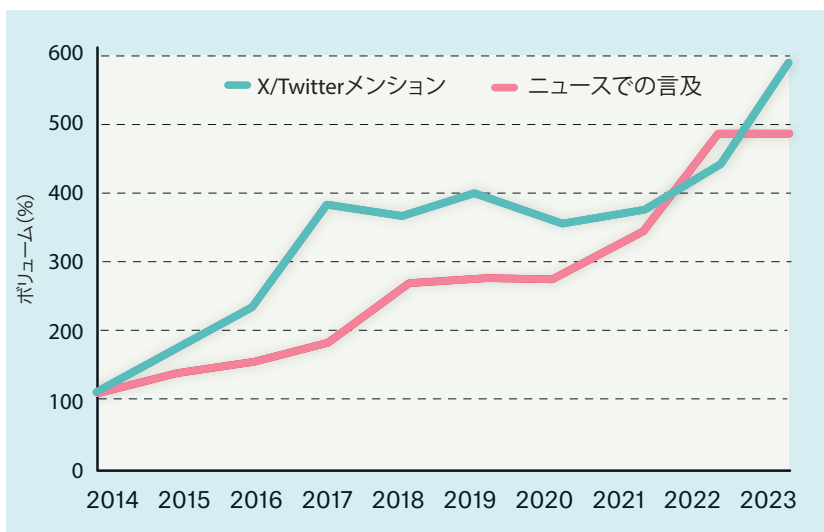
ニュースで取り上げられる更年期

ブランズウィックが2014年1月から2023年12月までの間にX/Twitterと英国・米国の一流ニュースメディアで「更年期」に関する英語の言及を分析したところ、女性の健康問題への関心が高まっていることがわかった。



子宮内膜症がチャットに登場

「サイレント・ディーズ(静かなる病気)」をめぐる議論はますます活発になっています。上記と同時期に、「子宮内膜症」も米国と英国の一流ニュースメディアやX/Twitterで注目を集めました。



くなったりする恐れがある。これをどう評価するのか? 苦しんでいる間、彼女たちが体験する症状は、末期患者と同程度に深刻なものとなり得る」とカー氏は指摘する。

子宮内膜症、多嚢胞性卵巣症候群、子宮筋腫などの疾患では、標準的なケアが確立していないこと

と、規制当局が新薬承認の判断に求める臨床エンドポイントや期待成果が定まっていないことも大きな問題だ。

とりわけ子宮内膜症の場合、子宮内膜に似た組織が体内の別の場所で増殖するが、明確な疾患マーカーがない現状は深刻といえる。この病気は世界で約1億9千万人の女性に影響し、激しい痛みや疲労、時には不妊を引き起こす。それでも診断までに数年、場合によっては数十年も要する。診断待ち時間の世界平均は、6年以上にも上る。

結局、女性の健康分野を本格的に強化するには、製薬業界が本腰を入れることが欠かせないとカー氏は言う。「製薬企業が女性の健康に真正面から取り組むと決めない限り、必要とされる新薬は女性の手元に届かない。」

では、業界が本腰を入れるには何が必要なのだろうか。

カー氏のバイオテック企業に出資したライフサイエンス系VC、Forbionの創業者兼マネージング・パートナーで医師のヒアート・ヤン・ムルダー氏は、製薬各社が近く、女性の健康分野がもつ可能性に目を向け始めるとみている。産婦人科の研修医としてキャリアをスタートしたムルダー氏は、より良い治療の必要性について、身をもって知っていた。

「私たち投資家の関心は、未充足の医療ニーズと、これらの疾患が極めて多くの人々に影響を与えているという事実により強く後押しされています。今後は、がん領域に依存しない新たな収益源を製薬企業が模索し始めるにあたって、この分野への注目は高まるはずですよ」と語る。

ムルダー氏は、非ホルモン療法の新薬が成功すれば、女性の健康という領域が、より多くの企業が参入を検討すべき、本格的な市場であることを示す重要な前例になると考えている。

そしてやはり、それと同じくらい重要なのは、「症状はただ耐えるしかない」という発想に異を唱え、変革を求める女性たちの声が挙がることだ。「HIVに対してより良い治療を求めてゲイ男性が立ち上がったのと同様に、女性たちも結集し、この問題の重要性を世の中に対して示してほしい」とカー氏は言う。

ムルダー氏も、「仮にこれが男性の問題だったなら、とっくに解決しているはずだ」と同意する。

ベン・ハーシュラー:ブランズウィック・グループ ロンドン事務所のシニアアドバイザー。ヘルスケア分野とライフサイエンス業界を長年取材してきた元ジャーナリストとして豊富な経験を有する。ロイターで30年以上勤務し、グローバル製薬担当特派員として活躍した後、2019年にブランズウィックへ入社。

チャリス・グレッサー:ブランズウィック・グループ ロンドン事務所のパートナー。英国ヘルスケア・ライフサイエンス部門のリードを務める。ヘルスケア領域のコミュニケーションで豊富な経験を持ち、科学ライターとしてパブリック・ヘルス・イングランドに勤務した後、ブランズウィックに入社。